

<実践研究>

地域子育て支援と大学の連携

—— 親子クラブでのことばの発達支援 ——

本渡 葵*・林田 真志*・川合 紀宗*・若松 昭彦*・牟田口辰己*

本稿は、広島大学「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（大学COC事業）」障がい者支援領域における、未就園児を対象とした子育て支援活動「のびのびくらぶ」の実施報告である。本活動は自治体と連携し、1歳半健康診査で「要経過観察」と判断された幼児とその保護者を対象としている。平成28年度は、計16回の活動を実施した。参加親子は各期5組、計10組20名であった。活動の企画・運営には本学学生ボランティア17名が参加した。参加した保護者10名のうち8名が「ことばの発達」に不安を抱いていると事前調査で回答していた。そのため、活動に絵本の読みあいを取り入れ、学生と参加児で自由に読みあうことを試みた。自治体との連携は、各期開始前後の打ち合わせ、毎回の活動後の振り返りおよび学生へのフィードバック、自治体主催の親子クラブへの学生参加、年度終わりの総括会議などを行った。

キーワード：地域連携 子育て支援 大学教育

I. はじめに

広島大学では平成25年度に文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（大学COC事業）」に採択され、「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」の事業を実施している。本稿は、大学COC事業の「障がい者支援領域」における、地域連携子育て支援活動「のびのびくらぶ」の平成28年度実施報告である。「のびのびくらぶ」は平成25年度に活動開始に向けた整備に着手し、平成26年度より活動を開始、以後継続して取り組んでいる。

本活動は、1歳半健康診査で「要経過観察」と判断された幼児とその保護者を対象とし、A市と連携のうえ、学生が企画・運営する親子クラブである。参加対象者は、先述の幼児とその保護者のうち、親子クラブへの参加を希望する親子5組である。保護者らは、子どもの言語面（言葉の遅れやわかりにくい喃語など）、生活習慣、行動面などが気になり、活動への参加を希望する場合が多い。

II. 活動の実際

1. 活動日時

Table 1は、平成28年度の活動日時である。

Table 1 実施日時（いずれも9時45分～11時30分）

I 期	平成28年6月14日・28日、7月12日・26日、8月9日・30日、9月13日・27日
II 期	平成28年11月8日・22日、12月6日・20日、平成29年1月10日・24日、2月7日・21日

2. 参加者（参加親子を除く）

大学側からは、学生ボランティアが毎回5名～8名程度、大学COC事業障がい者支援領域の業務に従事する教員（コーディネーター）が1名参加した。A市からは、毎回1～3名の自治体職員が参加した。

Table 2は参加学生の属性である。

Table 2 参加した学生の所属コース

特別支援教育教員養成コース	11名
英語文化系コース	2名
初等教育教員養成コース	1名
特別支援教育特別専攻科	2名
特別支援教育学講座博士課程前期	1名
計	17名

3. 活動の流れ

活動は、月に2回実施した。いずれも、9時45分～11時30分まで行った。Table 3は活動当日の流れである。

* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座

Table 3 活動当日の流れ

9:45 受付	・出席カードにシールを貼る ・保護者に子どもの機嫌や体調を尋ねる
自由遊び	・子どもは場に慣れる ・保護者同士やスタッフと情報交換をする
10:00 子ども 集団遊び	・子どもは手遊び、ダンス、サーキット、 工作、など ・保護者は別室、もしくは同室コーナー にて情報交換や相談
保護者 情報交換	
11:30 閉室	
片づけおよび 反省	

4. 事前アンケートをふまえた活動設定

活動は、自由遊びや音楽に合わせた運動、手遊び、工作などで構成した。参加前の事前アンケートによると、I期、II期に参加した10名の保護者のうち、8名が「ことばの発達」に不安があるとのことであった¹⁾。そのため、平成28年度は、ことばの発達支援を活動のねらいの軸として学生ボランティアと共有し、活動の企画・運営を行った。前年度の活動内容との主な変更点は、絵本の読みあいを導入した点である。

3歳未満児との絵本の読みあいについて、仲本(2015)は、「絵本を読むことによって導き出された言葉を介した子どもと保育者のコミュニケーション」に意義があると述べる(仲本2015, p.68)。本活動の参加児も3歳未満であることをふまえ、実際に参加児と読みあいを行う学生ボランティアに対し、参加児の発する言葉や表情などの反応を受け止めながら、絵本と一緒に楽しむよう事前に伝えた。

ある日の活動例がTable 4である。また、活動の様子をFig.1とFig.2に示す。

Table 4 ある日の活動例

	使用曲	内容
名前呼び	名前呼び	音楽に合わせて名前を呼ぶ
はじまりのあいさつ	あくしゅでこんにちは	音楽に合わせて歌いながら、近くの友だちや学生スタッフと握手をする
ダンス	ぐるぐるどっか〜ん	音楽に合わせて踊る
手遊び	はじまるよ はじまるよ おにぎり	音楽に合わせて手遊びをする
サーキット		音楽に合わせて、すべり台、トンネル、ドレミマットなどを通過する
工作		紙コップ、クレヨン、輪ゴムを使っておもちゃを作る
絵本の読みあい		学生ボランティアと一緒に絵本を読みあう
おわりのあいさつ	さよならのうた	音楽に合わせてさよならのうたをうたう

5. 自治体との連携

活動にあたり、広島大学のコーディネーターとA市職員は、参加親子に関する打ち合わせや学生ボランティアへの指導、毎回の活動のふり返しなど、打合わせを継続的に行なった。その他、A市主催の親子クラブに学生ボランティアが参加し、その場で得た知見を「のびのびくらぶ」での活動につなげた。

活動実施日当日は、連携自治体であるA市からは、職員が1~2名参加した。活動中は、保護者からの相談に応じ、子どもの様子を観察するなどした。



Fig. 1 活動の様子1



Fig. 2 活動の様子2

III. 保護者アンケートから

活動全体の評価と今後の改善を目的として、保護者アンケートを実施した。

1. 調査対象

2016年6月~9月、11月~2017年2月に実施した広島大学「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC)平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ」の活動の1つである「のびのびクラブ」に参加した保護者10名のうち、アンケートに回答したのは9名であった。

2. アンケートの内容および手続き

アンケートは次の①~⑦で構成した。①「のびのびくらぶ」で感じたことについて(活動の内容、時間、量、参加する子どもの人数の適切さ、今後の活動の継続について)、②活動全体を通して感じたよかった点、③活動全体を通して感じた改善してほしい点、④学生ボランティアのかかわり方の適切さについて、⑤学生ボランティアのかかわり方でよかった点、⑥学生ボランティアのかかわり方で改善してほしい点、⑦その他の感想を問う項目を設けた。

①④以外の項目は自由記述による回答を求めた。①については、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法とした。

アンケートは、全8回の活動終了後、連携自治体を

介して参加家庭へ郵送にて発送された。その際、アンケートへの回答は強制ではないこと、個人が特定されないようデータを処理すること、データは活動改善および教育研究のために用いることを書面で提示し、回答および返送をもって趣旨へ同意したものとする旨伝えた。

3. 結果

(1) 活動の内容、量、時間、参加する子どもの人数、活動の継続必要性、学生ボランティアのかかわり：

「活動の内容、量、時間」の適切さについて、「そう思う」が9名(100%)であった。「参加する子どもの人数」の適切さについては、「そう思う」が8名(89%)、「ややそう思う」が1名(11%)であった。また、「今後もこの活動を継続した方がいいか」については、「そう思う」が9名(100%)であった。

さらに、「学生ボランティアのかかわり方」が適切であったかどうかについて、「そう思う」が9名(100%)であった。

(2) 学生ボランティアのかかわり方でよかった点：

「学生ボランティアのかかわり方でよかった点」について自由記述による回答を求め、9件の回答を得た。そのうち、「子どもひとりひとりに真剣に向き合っていた」「優しく丁寧にいかかわってもらえた」など、参加児への学生ボランティアの向き合い方に関する回答が7件、「活動や遊びの工夫の背景に、子どもの特性への配慮が感じられた」など、活動への工夫や配慮に関する回答が2件であった。

(3) 活動全体を通して感じた改善してほしい点：

「活動全体を通して感じた改善点」について自由記述による回答を求め、4件の回答を得た。そのうち、「おもちゃの種類の変り」に関するものが1件、「学生ボランティアの男女比の変り」に関するものが1件、「活動回数少なさ」に関するものが2件であった。

(4) 学生ボランティアのかかわり方で改善してほしい点：

「学生ボランティアのかかわり方で改善してほしい点」について自由記述による回答を求め、1件の回答を得た。「活動の進行をもう少しスムーズにしてほしい」というものであった。

(5) 活動全体を通して感じたよかった点：

「活動全体を通してよかった点」について自由記述による回答を求め、9件の回答を得た。本活動学生ボランティア1名と稿者の話し合いによって、分析シート(Table 5)をもとに記述内容を分類した。1件の

回答に複数の内容の記述が含まれる場合、内容ごとに切片化し、分類した。その結果16の記述に分類することができた。

Table 5 分析シート(例)

概念	子どもの成長を実感
定義	活動の中で子どもの成長を見いだす
具体例	・回を重ねるたびにあいさつができるようになったり、 できることが増えてきた。 ・いろいろな活動の中で、子どもの成長が見られた。

16の記述は、それぞれ【子どもの成長を実感】(4)、【同年齢の子どもとかかわる機会】(4)、【保護者とかかわる機会】(2)、【助言を得る機会】(3)、【工作・遊びの体験】(3)であった(()内は記述数)。

IV. 考察

ここでは保護者へのアンケートのうち、「活動を通して感じたよかった点」をもとに考察し、今後の展望と課題について述べる。

1. 「活動を通して感じた良かった点」から

保護者らは、本活動への参加を通して【子どもの成長を実感】しているといえる。また、本活動が、未就園児の子どもにとって【同年齢の子どもとかかわる機会】であると同時に、その【保護者とかかわる機会】となっており、保護者と子どもの双方にとって人間関係の広がりにつながっている。また、本活動が、保護者にとって、育児や地域での暮らしに関し【助言を得る機会】となっていることがわかった。さらに、活動で学生ボランティアが提案する【工作・遊びの体験】は、「家庭ではできない工作ができた」「いろいろな遊びを知ることができた」など、貴重な機会となっていることがわかった。保護者の「育児の不安」「子どもの発育に関する悩み」への直接的アプローチ(【助言を得る機会】)に加え、子どもの【工作や遊びの体験】が、子育てに関する保護者への間接的アプローチとなっていると考えられる。

2. 今後の課題と展望

保護者アンケートから出された課題は、先の3)、4)で確認した。ここでは活動全体を振り返り、課題と展望を述べる。

まず、課題は大きく以下の3つが挙げられる。

①親子で遊ぶ活動を十分取り入れることができていな

い点

- ②活動と学びを往還することによる、学生の専門性向上への支援が十分できていない点
- ③学生が地域社会に参画している意識涵養が十分できていない点

①について、活動中は母子分離の時間を設け、その時間に保護者同士の懇談や自治体職員への相談などを行なっている。一方で、それにより子どもと一緒に体を動かす、手遊びやうた遊びをするなど、家庭でもできる遊びの提供については十分できていない。母子分離の時間も確保しつつ、親子で取り組める活動も増やしていく必要がある。

②について、本活動は「1歳半検診で要経過観察」と判断された未就園児を対象としていることから、発達特性を考慮した活動展開、かかわりに関する専門的な知識・技能が求められる。現状では、後藤(2008)が危惧するような「支援者の側から次々と繰り出す働きかけ」(後藤, 2013, p.225)が多く、参加児の能動的・自発的行動を促す環境作りが十分できていない。この背景には、様々なコースに属する学生らに対し、専門性を向上するための支援が不足している実情がある。また、本活動は有志の学生ボランティアが企画・運営している実状から、活動の振り返り・準備と当日の実施で完結しているのが実際である。学生らの限られた時間の中での運営・実施であることもふまえ、活動と学問知を往還し、学生の専門性を向上させていく体制を整えていくことが求められる。

③について、本活動が地域と連携した子育て支援活動であることから、活動に参加している学生は、地域社会に参画していることになる。しかし、活動の場所が大学内の教室であること等もあり、活動を通して地域社会に参画している意識が薄いように思われる。この背景には、学生が地域の子育てに関する状況について知る・学ぶ機会に限られている実状であろう。深作・古川・増田・生島・飯野(2015)は「大学教育のなかで大学生に子育て・子育てに関連した社会参加についての学びと活動の機会を提供することにより、地域社会のさまざまな活動への注目と参加の促進とともに、親準備世代に対する子育て支援も促すことになる」(深作ら, 2015, p.74)とし、全15回の「市民生活と

地域社会」の講義を通した「子育て・子育て支援への参加プログラム」を開発している。本活動を、他の講義やプログラムに位置付けることで、先の③の課題改善につながると考えられる。

活動参加前の調査から「ことばの発達に不安がある」との実態をふまえ、新たな活動を組み込んだ。事後アンケートからはその後の不安感について把握することができなかったが、保護者同士の談話では、本活動での絵本の読みあいをきっかけに、地域の図書館へ足を運ぶ機会が増えたとの声もあった。今後、意図した活動に対する評価測定方法について検討する必要がある。

次年度以降、未就園の子どもと保護者、地域社会をつなぐ場として大学を人的・知的・環境的に活かすために、自治体との連携に力を入れる。また、学生に対しては地域社会に参画している意識も涵養できるような取り組みを検討する。

文 献

- 深作拓郎・古川照美・増田貴人・生島美和・飯野祐樹 (2015) 大学生を対象とした子育て・子育て支援への参加プログラムの開発. マツダ財団研究報告書, 27, 73-85.
- 後藤守・川端愛子・後藤広太郎 (2013) 文教ベンギンルームにおける子育て支援のための関係力育成プログラム実践(第3報)―教職志望学生の行動観察力の育成のための「関係力育成プログラム」について―. 北海道文教大学研究紀要, 37, 219-235.
- 岡田由香・高橋弘子・佐久間清美・金尾洋治・山口江利子・神谷摂子・緒方京・志村千鶴子・大林陽子 (2008) 大学を拠点とした子育て支援の取り組み―大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告―. 愛知県立看護大学紀要, 14, 113-120.
- 仲本美央 (2015) 絵本を読みあう活動のための保育者研修プログラムの開発―子どもの成長を促す相互作用の実現に向けて―. ミネルヴァ書房. (2018. 1. 12受理)

¹ 連携自治体実施の事前調査による。

Child-rearing Support with Collaboration between Municipalities and Hiroshima Universities : A Parent and Child Classroom to Support the Development of Language

Aoi HONDO

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

Msashi HAYASHIDA

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

Norimune KAWAI

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

Akihiko WAKAMATSU

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

Tatsumi MUTAGUCHI

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

This paper is a report of FY 2016 implementation of child rearing support activities for prekindergarten children in Hiroshima University “Program for Promoting Regional Revitalization by Universities as Centers of Community : COC”. This activity cooperates with municipalities and covers infants and their guardians who have been judged to be “required follow-up observation” in medical examination for 1 year and a half. This activity is in collaboration with local governments, and infants and their parents who are judged to be “required follow-up” in health examination for 1 and half years are participating. In FY 2016, a total of 16 activities were conducted. Participating parents and children were 5 pairs in each period, totaling 10 pairs of 20 people. 17 student volunteers from our university participated in the planning and operation of activities.

In the preliminary survey, eight of the 10 parents who participated answered that they were concerned about “children’s development”. For that reason, we took reading of the activity picture book and tried reading freely with students and children participating. Collaboration with municipalities was conducted before and after each activity, each activity was handed over to the students, and feedback was given to the students. Students also participated in parent-child clubs sponsored by municipalities and held general meetings at the end of the year.

Keywords: region cooperation, parenting support, university education